

特定非営利活動法人

埼玉県絶滅危惧植物種調査団ニュース



ジョウロウスゲ *Carex capricornis*

も く じ

あいさつに代えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 2
活 動 レ ポ ー ト	
総会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 3
臨時調査委員・調査員会議・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 4
第1回観察会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 4
第2回観察会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 5

あいさつに代えて——環境の変動を生きる草木に思う——

NPO 埼玉県絶滅危惧植物種調査団 代表理事 愛川 敬武

平成 21 年度第三回総会に当たり、ごあいさつを申し上げます。調査団の皆さんには種々ご多忙の中、法人としての仕事に多大なご協力を頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。お陰をもちまして平成 20（2008）年度には、僅か 4 ヶ月の短期間にもかかわらず春植物、群落、外来植物の調査にご尽力を頂き、630 頁を超える膨大な報告書をまとめられましたこと、調査員と協力者と事務局の底力を見せて頂き感動しました。まことに頼もしいことでありました。

さて、気象庁によれば日本の平均気温が 20 世紀の 100 年間に 1.06℃上昇したそうです。桜の開花は 50 年で平均 5 日早まり、紅葉は 2 週間遅くなったとのこと。21 世紀中には平均気温は 2 乃至 3℃上昇すると予測しています。

情報化社会では話を分かりやすくするサービスから、環境問題が切迫していることを強調します。しかし、地球温暖化の話のなかでいう温度や時間の幅は、我々の日常生活の気温の変化や時間の感覚からかけ離れています。それゆえ、温暖化はウソだという話しさえ飛び交い、どう考えてよいのか迷う有様です。

太平洋やインド洋の島国や水の都ヴェニスが、水没してしまうことを心配しているとか、大気中の二酸化炭素が海水に溶けて海水が酸性化しているという話には実感が伴いません。このような人類の鈍感さに比べて、動物や植物たちは素晴らしい感覚を備えており、我々の観測の技術や情報化社会の抜け落ちたところを補ってくれています。

例えば、近ごろでは、暖地性のヨコヅナサシガメが埼玉県で増えてきたとか、静岡・南信から南とされていたタラヨウが、埼玉西部の丘陵に出現して驚かされることなどです。

京都プロトコルは、気候変動に関する政府間審査団（IPCC）の科学者たちが、国連気候変動枠組み条約の締約国第 3 回会議（COP3）を京都で開き、2007 年に定めた議定書です。

これは 2008 年から 12 年までの温室効果ガス削減ルールですが、米・中・露・印が加わらず、それでは効果は上がらないという国々があり、主催した日本は苦勞してきました。

2008 年 12 月にはコペンハーゲンで COP14 が、ポスト京都、つまり 2013 年から 17 年までのルール作りの交渉手順を決めました。しかし「米国が気候変動問題のリーダーになる」というオバマ新大統領の 1 月就任を控えて、それ自体は喜ばしいことではありますが、先進国間や先進国と途上国間の調整がつかず、はっきりとした内容の合意はできなかつたと報道されました。

さらに、この 4 月 8 日までドイツ・ボンで開かれた「枠組み条約」特別作業部会も、現在の京都議定書の延長に留まるのか、新コペンハーゲンプロトコルを目指すことになるのか、先進国全体の中期削減目標は合意できるのかは、不明のまま終わったそうです（読売新聞:2009.4.9）。経済や政治が優先する交渉はこのように浮き草のようです。

我々 NPO 法人絶滅危惧植物種調査団の仕事は、環境が変化流動する中で、植物がどんな暮らしをしているかを記録することです。この団体の名からはレッドデータブックに挙げられた絶滅危惧植物だけを探すのだと思われるかも知れません。

しかしそれだけではありません。目を見開き、気候変動と環境政策との狭間に生きてい

る植物たち全体の動静を見渡す必要があります。植物たちは鋭敏に温暖化や環境攪乱に反応しています。このことは、我々が2008年12月から今年2月に行なった調査ではっきりしてきました。初めて外来植物調査を併行して行ったことの効果でした。

埼玉県環境部みどり自然課から受託した“早春植物と群落の遷移と外来植物の動向”を含めたあの調査です。放置されたアカマツ林や雑木林の中で、また旺盛な外来植物の繁茂のそばで、細々と生きる在来種の姿を思い、気が付いたのです。

1998年の群落調査のまとめをあとづける調査と、2009年に初めて実施した外来植物の調査とを重ね併せた時、環境の圧力に耐えている在来種の姿が見えてきたのでした。

筆者ひとりの狭い知見なのかも知れませんが、ウバユリ・ウマノアシガタ・オドリコソウ・ゲンノショウコ・コマツナギ・チゴユリ・ニリンソウ・ヒトリシズカ・リンドウ・ワレモコウなども勢力が衰え減少して、絶滅を危惧するべき状況に追い込まれているのではないか、という心配が湧いてきたのでした。

気候温暖化や工場建設・宅地造成・道路整備・ヒートアイランド現象などの人為・人工的環境攪乱により、土は乾燥しアルカリ性化します。これに耐える外来種の旺盛な繁茂が、これまでありふれていた在来種の衰退を引き起こしているのでありましょう。

この外来種調査の意外な効果に加えて、もうひとつ特記したいことがあります。

それは今回の調査に初めて使用した埼玉県の新しい地域区分図の効果です。この区分図は、1998年度版県植物誌の調査会が集めた標本を、こつこつと再点検し整理を続けてきた高校生物研究会グループが、その作業の中から発案したものでした。この新しい区分図によって記録した調査結果が、県内の希少種や外来種の分布の実態をはっきりさせる効果を挙げたことです。これは本当に喜ばしいことでした。

我々調査団はこれからも、植物の実態を記録し、その動向を情報として発信するためのアンテナを一層高く広げるのがよいでしょう。これからも団員の活発な意見交換と新しい発想によって、調査団はますます知恵と活力とを備える集団となって頂きたいと願っています。団員皆さんの活躍に期待して、平成21年度のあいさつと致します。

活 動 レ ポ ー ト

【総会】

日 時：平成20年6月8日（日） 11：00～12：00

場 所：川越福祉センター

参加人数：23名（委任状11名）

NPO法人埼玉県絶滅危惧植物種調査団平成20年度総会が、埼玉県みどり自然課野生生物担当藤沢主幹と芦川主任を来賓に開催されました。

当日、平成19年度の活動報告、会計決算・監査報告や平成20年度の活動計画案、会計予算案が審議され承認されました。

また、本法人の基となった任意団体埼玉県絶滅危惧植物種調査団を解散し、その会計残金が本会への寄付金として承認されました。

20年度指定希少野生動植物の候補種の選定調査（植物）の調査方法についての説明がなされました。

総会に先立ち任意団体の調査委員・調査員会議が下記のように開催されました。

日 時：平成20年6月8日（日） 10:00～10:30

場 所：川越福祉センター

参加人数：23名（委任状11名）

19年度指定希少野生動植物の候補種選定調査書（植物）の調査報告および決算・監査報告が承認されました。

任意団体埼玉県絶滅危惧植物種調査団の解散が決議され承認されました，その会計残金についてNPO法人埼玉県絶滅危惧植物種調査団へ全額寄付することが承認されました。

【臨時調査委員・調査員会議】

日 時：平成20年11月23日（日） 10:00～12:00

場 所：埼玉県自然の博物館講堂

参加人数：20名

平成20年度埼玉県レッドデータ植物編再改訂調査業務受託に伴う作業分担について以下のごとく審議・決定しました。

1. 調査期間 20年12月より21年2月末までとする
2. レッドデータブック掲載種調査
 - (1) 文献調査：担当木村和喜夫・石渡孝行
 - (2) 隣接県のレッドデータ掲載種の比較：担当矢島民夫・三上忠仁
 - (3) 標本調査：担当矢島民夫・三上忠仁・岩田豊太郎
 - (4) 現地確認調査：担当田中実
 - (5) 県内区分：担当牧野彰吾
3. 植物群落調査：担当須田大樹
4. 移入植物調査：担当愛川敬武・太田泰弘

【第1回 野外観察会】

日 時：平成21年10月29日（水） 10:00～15:00

場 所：寄居町風布地区

参加人数：23名（指導者：高橋重男理事）

天 気：晴れ，

活動内容： 当日は天候に恵まれ，風布旧分校前駐車場に9時集合する．ここから道路脇の植物を観察しながら塞神峠を経て日本水まで移動し昼食をとりました．その後，釜伏山頂から釜山神社、関所跡を経て元の駐車場にもどり、15時解散となりました。



時期的にキク科の花が多く観察されましたが、特にキクタニギク（アワガネク）の黄色い花が目立ちました。林内では、埼玉県準絶滅危惧種のマルバベニシダの紹介があり、神社付近の路端にはツルリンドウの花と赤色の果実も観察されました。

県内ではこの蛇紋岩地帯にのみ生育するムギラン（埼玉県保護条例指定種）の生育地が紹介されましたが、一帯は急峻な岩場で近づいてゆっくりと観察することはできませんでした。（矢島）

【第2回 野外観察会】

日時：平成21年3月28日（土）

場所：所沢市糎谷（八幡湿地）から入間市（緑の森博物館）

参加者：16名

天気：晴れ

活動内容：スミレの観察と早春の植物

八幡湿地でタネツケバナ、ムラサキサギゴケなどの植物を観察後、緑の博物館方面に移動。途中、人家の近くで、ヒメスミレ、ノジスミレ、コスミレ。日当たりの良い土手にはタチツボスミレ。湿地沿いにはツボスミレ。また丘陵の道沿いに咲く白い可愛らしいフモトスミレやマルバスミレ、ヒカゲ



スミレ（タカオスミレ）。林内では一番先に咲き始めるアオイスミレ、ナガバノスミレサイシン。久々に多くのスミレを見ることができました。その他には、ヤマザクラ、コブシ、ウグイスカグラ、ジロボウエンゴサク、ニリンソウ。また希少種のイチリンソウ、カントウミヤマカタバミ、シュンランなども観察できました。

（山下）

【あ と が き】

今年度もやっと編集作業を終えることができました。

昨年11月に埼玉県より「20年度埼玉県レッドデータ植物編再改訂調査業務委託」が下りたため、「20年度希少野生動植物の候補種選定調査書（植物）」の報告書作成と重なり、調査員の皆様は大変忙しい年となってしまいました。

今年の「レッドデータブック再改訂」関係の仕事は不慣れなデスクワークが多く、調査員の多くが得意とする現地確認調査が少ない「ストレス」の溜まるものでした。

しかも、実質3ヶ月という短期間のまとめ作業で、それぞれの仕事分担もうまく機能しなかった部分があり、反省点が見られるところです。

ともあれ、NPO法人としては当初計画された事業「年2回の観察会」を含め無事実施することができました。会員の皆様のご協力を感謝します。

<表紙の写真> ジョウロウスゲ 絶滅危惧ⅠA類（埼玉）・絶滅危惧ⅠB類（国）

スゲの仲間ではよく目立つ、長楕円形で大型の雌性側小穂をつける。このため花期に同定を間違えることはない。分布は北方系で関東はその南限と考えられる。県内では東部低地の池沼や河川岸に稀に見られる。最近、生育地が減少しており絶滅が心配されている。

埼玉県絶滅危惧植物種調査団ニュース

2009年3月31日

編集・発行 NPO法人 埼玉県絶滅危惧植物種調査団

発行責任者 矢島民夫

発行所 〒340-0012 埼玉県草加市神明2-2-48

TEL・FAX 048-924-7288

事務局 〒350-0042 埼玉県川越市中原町2-10-1

TEL 049-224-1003